

今里孝章先生と“空”認識の立場

木 村 正 身

I

はじめに、若干のおことわりを述べたい。筆者は、ご多分にもれず、西洋、それも近代イギリスのことばかりにかかずらってすごし、日本人でありながら日本・東洋のこと、とりわけその唯心的諸側面にはすこぶるうといという平板な人間類型に属してきた。加えて筆者は、家門の宗旨も神道なので、仏教のこととなると、きわめて基本的・常識的な事項についてさえ、ろくにわきまえるところがないと思われるから、仏教哲学の権威であられるとともに讃岐坂出における浄土真宗本願寺派の古刹として著名な真利山教専寺のまぎれもない第13世住職でもあられる今里孝章先生についてそもそもなにかを書くということ自体、幾重もの意味で潜越至極であることを、深く自覚している。

それにもかかわらず、先生のご退官にあたりあえてこの一文をものさせていただくことになったのは、ひとつには、又信学園において、高松経済専門学校時代以来の古い教師仲間として今里先生を存じあげ、現役でまだ残っている人間としては、円藤真一学長をべつとすれば、いまや戦前から在職の者は誰もいなくなり、せめて戦後時代では唯ひとり、筆者だけがいるという、単純で決定的な客観的事情があるからである。今里先生とされても、又信学園が経専から新制香川大学へと転換するのに伴って、一般教育担当という理由で学芸学部（現、教育学部）へ移籍された諸先生（上阪・栗山・岡田・宮崎・村尾・今里の計6先生）のうち、学園を定年退官される殿り役となられたわけなのである。そして、筆者自身の定年も、もう近い。マザー・グースの唄の1つを想起しながら、筆者はこれを書いている。

だが、いまひとつ、もっと積極的・主体的に筆者が本稿をすすんで書かせていただくことにした特殊な理由が、ある。それは、社会思想史における西洋と

東洋との交流という大きなテーマに筆者が近年おくれればせながら関心をもちはじめていた矢先、たまたま先生のご退官記念講義を拝聴して、とりわけ深い印象を刻まれたということである。この記念講義は、「生と死」と題され、昭和53年2月25日の午後、教育学部新館内の第102講義室で実施され、聴衆があふれ、非常な名講義であったと思うが、教育学部哲学研究室のヴォランタリな主催によるもので、事前の案内もあまりゆき届かなかったようで、経済学部からの出席者も、教職員としては筆者唯1人だけらしかったが、その筆者も、当日たまたま経済学部廊下の学生向け掲示板の小さくて見にくい青焼きコピー紙の掲示ではじめて知り、すべりこみで聴講することができたのであった。もし筆者がその紹介記述をしておかなければ、又信学園の側ではおそらくこのことを記録するすきもないかもしれないということが、筆者の執筆義務感を決定的ならしめたのである。

以上の次第で、筆者はこの1文では、むしろ今里先生のこの記念講義の内容の紹介を中心としたいと考えるのではあるが、やはり順序として、すこし先生のご経歴面について筆者なりに拝承していることから、述べてみたい。

II

先生のお家は、代々教専寺の住職で、世襲ということである。教専寺は、本来は「教きょう願せん寺」と書き、その由来は古く、淵源は関ヶ原合戦時代に玄諦和尚が開いた寺に遡るという。元和3年(1617年)、空玄大徳が同寺を西本願寺の末寺として再興したのが、現在の教専寺の開基とされている。爾来、三百数十年。第11世住職游玄法師は、先生の御祖父にあたり、本堂を現在のものに改築され、昭和8年に74歳で没されたが、ずっと本山に勤務され、多年衆会上首しゅうえじょうしゅ(現在の宗会議長)および執行長しゅぎやうちやう(現在の宗務総長)として一派運営の重責を背負われたため、寺は事実上、先生の尊父孝文法師が、何十年間も守護管理を担当されたという。先生は、令妹3人があられるが、独り息子で、本来当然当寺住職を継ぐものとされたが、尊父法師は寛大で、秀才の先生が、早くから頭角をあらわし、旧制丸亀中学の第4学年から松山高校(文科乙類)に進み、さらに

司法分野を志して、昭和9年春、京都帝国大学法学部に入学されたとき、これをゆるされた。ちなみに、尊父法師は、丸亀中学および仏教大学のご出身であった。折しも京大は、滝川事件の直後で、刑法の滝川幸辰教授に代って宮本英脩教授が着任したところであり、今里青年は同教授の指導を受けることになったが、手続き法がきらいで、商法などにも興味がなかったとのことである。なお、民法では石田文次郎・近藤英吉両教授の講義が、公序良俗規定の解釈などをめぐってがいに批判しあって、面白く感ぜられたという。けれども、法学部在学中に、寺のある内部事情のために、先生はやはり法曹界への志望を断念せざるをえないことが判明し、種々考慮された末、昭和12年春、同学部卒業と同時にあらためて文学部哲学科に学士入学をされたのであった。

文学部では、あらためて興味を法律から哲学に移しつつ、^{はたにりようたい}羽溪了諦教授（仏教学）の指導を受け、かたわら、久松真一助教授（宗教学）にも教導され、その感化をも受けるところが大きかった。久松助教授は、西田門下で、西洋についてはバルト神学の「無」を中心に、東洋では西田哲学そのものを、やっていた。なお、九鬼周造教授も、『偶然性の問題』で有名で、その影響をも受けた。子爵で貴公子然とした風貌の同教授の帰朝したての講義（西洋哲学）は、感銘的であった。今里青年は、西洋哲学中、とくに懷疑論に興味をもち、人間の立場の有限さ、崩壊性を感じ、その向うに、法の世界とはべつの宗教の世界を、あらためて認識したという。卒業論文は、「“法空”について」と題し、大乘法空観の意味について西洋的および田辺哲学的な弁証法的理解との関連で書かれた。ちなみに、卒論審査は厳重をきわめ、文学部哲学科における関係教官全員の前で口頭で総攻撃的におこなわれ、その点数と、他の授業全科目の総平均点とを平均して最終学業成績が決まるので、卒論の重みはきわめて大きかったが、先生の卒論の出来ばえも、全体成績も、ともに出色のものだったと推測される。

III

先生は、昭和15年春、京大文学部哲学科をご卒業後、ひきつづき同大学院に

在籍されてのち、17年3月、高松高等商業学校に赴任された。私事にわたるが、これは筆者が高松高商を卒業して2年後にあたり、筆者のほうは、東京商科大学の学生（最終学年）で、杉並区役所での徴兵検査の日も近かったわけであった。このようなけわしい戦時体制下に学園に赴任された先生が、いかに学問的にも、また日常生活面でも、苦勞されたかは、拝察するに余りがある。ご就任後、先生は付属図書館主任を命ぜられ、前任者の高階順治教授が沢山の哲学書を購入されているのをみて感服され、そこに学問的なやすらぎの糧を得られたようであるが、とくにフッサールにかんする専門書が多かったそうである。あきらかに高階教授の哲学はフッサールの「純粹意識」を拠り処とされたのであり、本来、フッサールは到底超国家主義の支持物となるようなものではなかったのに、高階教授は、なにかの誤解にもとづいた政治的処遇の犠牲となられたのではあるまいか、と先生は推定されている。もっとも、先生とされては、フッサールの「純粹直観」の世界は、大乘空觀にどこかあい通ずるものがあるかのようではあるが、とくに直接にどうこうということもなかったとのことである。つまり、先生ご自身の拠り処は、すでにフッサール以前に大乘派諸仏典のなかに独自に見いだされていたのであろう。

学園では、教官が次々と出征しても欠員補充人事はなく、残留者が代講することになり、このため、先生は、まず「国語」、ついで「商法」の講義を担当させられて閉口されたとのことである。もっとも、この間に学生をつれて九州へ行ったりで、連続1年間の講義の苦勞ということもなかったそうである。戦況がすすむほどに学園も軍隊化し、久川教授が中隊長で先生が小隊長、といった編制下の毎日となったという。昭和19年春の勅令で、高松高商は高松経済専門学校と改称された。こんな状況下で、先生の日常生活面での救いとなったものは、茶道であったと承る。早朝登校・教練等のため坂出から通勤できなくなり、高松市六番丁の富永家に下宿されることになったが、たまたま富永夫人が官休庵茶道の師匠であられたため、当時古墳調査中の寺田貞次先生らとともに誘導を受けられ、『南方録』も研究されて、「侘び」と仏教哲学との関連をも省察されるようになったとのことである。

こうして先生は、けわしい戦時を凌がれたのであった。戦災（昭和20年7月4日未明の高松市空襲で、フッサール関係書もふくめ、量・質ともに誇っていた付属図書館の図書もことごとく灰燼に帰した）——善通寺移転——そして、終戦。まもなく教職員・学生一同は、空腹をかかえて学園高松復帰・復興のための募金活動に大奮闘することになったが、これに対する卒業生有志の協力も坂出地区ではとりわけ活発であって、又信学園のこまやかな人間関係の持続に深く心惹かれたということを、先生は強調されている。それだけに、新制大学の発足にともなう学芸学部への移籍の結果、そうした暖かい又信の人間関係から日々なにかと遠くなっていったことが、じつに淋しく感ぜられたとも、先生は述懐されている。

筆者は、支那大陸から復員して1年後の昭和22年春に善通寺時代の経專に着任したのであったが、おりしも学園は、高松復帰決議の直後で、復興の計画や募金のことでざわめきたち、皆一生懸命になっており、新参者の筆者もたちまちその渦中にまきこまれた。そんなあわただしい状況下で、先輩教官のお1人としての先生のご面識をはじめて得たのだが、そして、以後公私の諸機会に一方ならず、先生からなにかと有益な助言・教導を頂戴するとともに（とくに、ヴィンデルバントやリッカートについてご教示を得た記憶が、ある）、先生の温容に深い親しみを感じてきたことはたしかなのであるが、しかし非力も顧みずに近代西洋精神の形成にかんする我流の追求に夢中で明け暮れていた筆者にとって、じつのところ古代宗教とか仏教哲学のことなどは、若気の至りでたんなる日本的過去にまつわる遺物にすぎないものとして、ひさしく関心の反対極にあり、いきおいその方面の専門的權威であられる先生に向けて積極的にシリアスな学問上の切磋琢磨をお願いすることろくにないままにすぎってしまったことを、率直に告白申しあげなければならない。けれども、それでは到底駄目ではないかと、近年ようやく痛感されてきた。そして、あまりにもおそまきにはあるが、先生のご退官記念講義を拝聴するにおよんで、にわかに筆者の視界がなにかあたらしくなったように感じられる。筆者をして聴講に赴かしめたなにかが、あらかじめあったことも、事実である。

IV

そこで、先生のご退官記念講義「生と死」の要旨を、筆者なりに理解しえたところに従って以下に記録することにより、先生の思想に近接させていただくよすがとしたい。ありうる不備や誤りや偏りは、もとよりすべて筆者の不敏のせいとして、あらかじめご寛容を願っておきたい。——

悟道の要諦につき、大乘仏教中に諸派があり、般若空を主張する論理主義的大乗中観派に対して、唯識派ないしヨガ行派は、むしろ心理主義的立場から、解深密教の教典に拠りつつ独自の解釈を試みた。とくにアサンガ（無若）の弟ヴァスバンズー（世親）の説について、紹述してみたい。

ヴァスバンズーによると、唯識派の理論がつぎのように説かれる。人間には、六識——色（眼識）・声（耳識）・香（鼻識）・味（舌識）・触（身識）・法（意識）——の他に、第七識（マナ識：生きている間の最終の我の生理意識。境界愛・自体愛・当生愛の基礎）および第八識（アラヤ識：住居・容器・蔵としての、認識以前の認識。無我の根本識）がある。（ちなみに、秘峰ヒマラヤの語源は、ヒム〔雪〕+アラヤ〔蔵〕である。）以上の諸識、とりわけ第八識、すなわちアラヤ識によって、人間の所作・ゆき・生活、つまり「業」（カルマ）の諸面が荷われる。「業」には「表業」と「無表業」とがあり、後者は、集力し、アラヤ識の中に滲みとおり、滲み着く。すなわち「薫習」する。その結果は、「種子」となる（「引果の功能」）。引業は総報を、満業は別報を、それぞれひきだす。かくして、われわれ人間の現実の行為、すなわち「現行」は、「種子」を薫習し、種子はまた現行を生ずる。「種子生現行、現行薫種子」。

こうして、アラヤ識は種子識であることによって、「業」が「業」を生むことになる。いわゆる「我」は、容れものたるのみ、主体ではない。なお、「業」の各人ごとのちがいは、境涯のちがいを作りだす。アラヤ識をめぐる以上の「輪廻」は、かねてウパニシャッドにもあったものだが、ウパニシャッドでは、古代西洋のピュタゴラス派の「魂」と同様、輪廻の

「常一主宰」つまり主体は、アートマン、すなわち「我」であった。しかし、仏教では、「我」が否定され、とりわけヴァスバンズーでは、アラヤ識が主体となる。ここでは、「我」とは、心身すなわち五蘊^{ごうん}の寄りあい世帯たるのみ(「五蘊仮和合」)。「我」は、仮象たるのみ、「仮我」たるのみ。「生」も、じつは心(火)が身(薪)で燃えることにすぎない。結局は、「業」が、アラヤ識という主体を媒介として「業」を生むのにほかならない。その状況は、不断の推転である。すなわち、「恒転如暴流」(暴流とは、滝の意)。こうして、生・住・異・滅の順で、不断に「生」は「滅」に転じ、「滅」は「生」をはらむ。断絶即連続、生即滅、滅即生。

ところで、アラヤ識は、「無我」としての主体の弁証法的な流れであって、それ自体は超時間的であり、不死である。いわゆる「死」は、人間としての死で、アラヤ識の死ではない。アラヤ識は、永遠の輪廻に従うのみ、転化するのみ。それでは、この状況下で、仏教の大目標たる、生きた個々人の苦悩の世界からの実践的解脱、絶対安穩の境地への实际的到達は、はたして可能であろうか。この状態のままでは、業の輪廻から個人は脱脚できない。すなわち、世俗的個人は、第七識による執着、つまり「迷い」のため、それを包む輪廻の枠から離脱しえないのである。けれども、生きた個人も、もし諸識への洞察によってついに「無我」の流れそのものを諦観しうる立場にたちうるならば、迷いを滅せしめ、三世にかんするいわゆる「空」(Śūnyatā)の悟りに到達しうるであろう。このとき、アラヤ識とそれに媒介されてうごく「業」の輪廻は、消えるであろう。この「空」の悟りを得るための具体的な実践手続きとして、ヨガ行がある。

大体以上が、ヴァスバンズーの考えた、生と死の真相にかんする推論についての、自分なりの解釈である。――

先生の記念講義の要旨を筆者なりのあらっぽい理解に従って書けば、およそこんなものではなかったかと思われる。考えれば、先生は、ヴァスバンズーの仏教哲学思想の跡づけにおいて、ヘーゲルや田辺元とはちがって独特に宗教的

(とくに大乘仏教的)に超論理的な経路での、唯心論(唯識論)的極致における弁証法的立場を、例証されたのではないかと、考えられるのである。

筆者は、いま、このような先生のお立場の是非について論ずる資格がない。たとえば、「無我」の流れそのものを諦観しうる実際の立場そのものも、最広義における一種の「我」の立場なのであって、たんなる生理的な「私」を「無我なる私」にまで形成してゆくていの「我」は、最終的に尊重され、このことによってこの立場は実践的な唯識派たる面目を保つとのことであり、こうした実践上の極限的な「我」の立場を「第九識」として認定する説もあるとのことであるが、このように普遍的に、個人の心身の生死をとおりこしながらなお存続するていの「無我」の我とは、じつはカースト制の一時的弛緩に対抗すべく古代インド都市国家=大氏族共同体の主体性をより合理的に再編成し永久固定化しようとしたブラーマンのイデオロギーの1変種だったのではあるまいか、といった我田引水の素人質問も、筆者は刺激されて提出したく感ずるのは事実だけれども、只今はこれを控え、もっとよく調査・再考してからのことになんかと思う。また、現在の先生のお立場が、ヴァスパンゾーの所説と厳密に同一なのかどうか、異るとすれば、どのように異なるのか、また、現在の先生のお立場は、かつての京大哲学科卒業論文の趣意とくらべてどのように発展的、もしくは回帰的であるのか、といった諸点についても、筆者は現時点で判断材料をもちあわせていないので、この点も留保させていただかなくてはならない。

が、いずれにせよ明白なことは、わが国が、いわゆる最先進国の仲間入りをした現在でもなお、制度的に代表的な大乘仏教国でありつづけているばかりでなく(この点は、じつは副次的問題面と申せなくもないが)、いまや科学の進歩による宇宙の解明がかえってますますその根源の神秘を示しつつあり、この点で西洋的科学・芸術思考の限界と原始東洋的宗教思考・実践の側からの啓示の必要とが種々のかたちで真剣に指摘されつつあるということ、また、とくに日本社会が近年急速に高齢化社会の段階に入って、人々が老いと死とをめぐる諸問題と実際に深刻に対決しなければならない局面が日々ますます拡大しつつあるということである。たとえば、最近あるアメリカ仕込みの著名な若い人気

グラフィック・デザイナー（横尾忠則氏）は、芸術家としての粗雑な自我からの脱脚をはかるために、あえて熱波の支配するインドでの修行を志したそうであるし、また、筆者の身近に瞥見される老人福祉のぎりぎりの最終実践課題も、もはや所得保障でもサービス保障でもなくて（これらは、前提にすぎない）、老人の1人1人が即身成仏またはこれに相当する信仰を獲得できるかどうかにかかっていると思えるふしが、ますます感じられる。このような事態をあれこれ反省してみると、平素、インドの固定型超階級社会への史的唯物論の立場からの容赦ない批判にくみしているはずの筆者にとってさえ、宗教と学問とを独自に黙々と実践的に統一されている先生のお立場は、あらためて重い現代的存在理由を提示しているように感じられてくるのである。

V

ところで、先生とされては、宇宙や老いや死の問題は、けっしてそれだけを切り離して考えるべきものではなくて、現世における若い生命の刻々の生成の問題との不可分な統一的連関としてとらえるべきものと考えておられるにちがいない。教専寺は、既述のとおり由緒と風格のある大きい古刹なのではあるが、7月下旬のある朝、筆者が訪問してみると、けっして涅槃的な静寂に包まれてばかりはいないことが、わかった。幼童たちの元気な歌声や応答・歓声があちこちから聞こえてくる。ルンビニ幼稚園は、ちょうど授業中で、まだ夏休み入り前なのであった。先生はこの幼稚園を、つとに昭和27年に、先生ご自身の創意で開設された由である。「ルンビニ」(Lunbini)とは、釈尊の誕生した花園の名称であり、それは、古代インドのマガタ国カピラ城のほとりにあり、摩耶夫人が里帰りの途上、この花園で陣痛・出産し、釈迦王子が生まれたので、めでたいということで採った称呼で、邦訳すれば「百花園」にあたる。全国的にもこの名の幼稚園がいくつかあるらしいが、香川県下ではユニークな存在となっている。筆者は、大乘派の寺院を先駆的に現代児童教育事業のために開放された先生のアブ・ツ・デートなご英知と、日々その着実な経営に心をくだかれているご精励ぶりについてだけでも、あらためて先生への畏敬の念を深くせ

ざるをえなかった。

先生のご趣味について伺ったところでは、囲碁・将棋などの勝負ごとは一切不得手だが、茶道と花づくり、若干の野菜づくりなどは、実益もあり、興味がつきないとのことである。ただ、7年ほど前に、庭園のミノムシ退治の折に右肩を怪我され、爾來右手の運動がご不自由で、いまもなお治療に通われており、きき腕で枝切り鋏を操作するのも困難となられて、大変残念されているご様子である。しかし他面、ご退官後にあたらしく水墨の道を志され、目下鋭意ご準備中と承る。これは、ご成功すでに疑いなく、きっとすばらしい作品を近く続々ものされるにちがいないと、筆者はたのしく期待申しあげている。先生のご健康は、右肩のことをべつとすれば、近年大変良好であられるようである。ある長い時期、消化器を弱くされてやせておられたようであったけれども、数年前にすっかり全快され、最近では肥えられて、まるで青年のように若々しいご血色でいられる。

本当に、先生は、日本における伝統的なものの精髓の継承を、日々模範的にしづかに、そしていかにも自然に実践しておられるように思われる。この上とも先生のご健勝とご長寿、そしてお仕事およびご趣味の隆々展開を、心から念じあげる次第である。